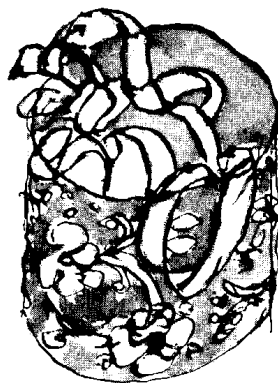


田中小実昌

ご臨終トトカルチヨ



泰流社

ご臨終トトカルチヨ

定価——九五〇円

著者——田中小実昌◎

発行者——西村允孝

発行所——泰流社

本社〒112 東京都文京区小日向2—18—4

編集部・営業部〒160 東京都新宿区南元町10

電話〇三(三三五) 五〇五三—営業

〇三(三三七) 六五五六—編集

振替 東京〇——一六三七六五

印刷所——誠之印刷株式会社

装幀者——野見山曉治

編集者——高橋 徹

目次

I LOVE YOU	5
サインはエッチ	41
「月見草」の三階	79
教授と娼婦	125
うみねこの声	157
恥ずかしい性	187
ご臨終トトカルチヨ	213

ご臨終トカルチヨ

I LOVE YOU

「あーあ、シラケたわあ」

ベットは天井にむかって、フシをつけ、ため息をもらした。

ベットの足のさきは、おれの顔にくっつきそうなどころにある。ため息といっしょに、ベットの足の親指もフシをつけてうごいた。

ストッキングをはいてるので、網ですくった小魚のように、ベットの足の親指が身をよじる。

「シラケちゃ、いやーよ。」

モコが、知床旅情のメロディでうたいだし、おれの足を、自分の足ではさんだ。

モコの足とおれの足、モコの頭とベットの頭、そして、ベットの足がおれの頭にくっつき、おれたちは三角形になって、絨毯の上に寝ころがっていた。

ここは、店の二階のママの部屋だ。ママは玉川の奥沢にも家があるが、ときどき、新宿の店の

二階に泊る。新宿でも、かなり大きなバーだ。

夜になって九州地方に霧がでたとかで、福岡行の旅客機が欠航になり、羽田から新宿の店に電話すると、「今夜から、あんたも福岡にいていいなし、お店に泊るつもりでしたので、こっちにきてよ」とママは言った。

奥沢の家には、建増しをしたアトリエがあり、今は、おれのアトリエになっている。しかし、おれのために建てたアトリエではない。

ママは、おれとあう前に、エカキばかり、四、五人の男がいたという。そして、さいしよに処女をやぶった男もエカキで、その男に、おれがそっくりなんだそうだ。（処女をやぶる、なんてひどい言葉だが、ママは、そう言った。それに、処女をやぶられるときは、たいてい、さいしよじゃないのかなあ）

おれは、福岡で個展をやることになっていた。福岡は母の郷里で、終戦後、母は、福岡で、クラブという名の米兵の客がおおい店をやり、やはりママとよばれていた。（父はエカキだが、終戦の前の年、おれが生れるとすぐ、結核で死んだ。結核なので、兵隊にも徴用にもとられず、絵を描いていられたんだろう）

こん度の個展も、終戦後、母のパトロンだったらしい松田という段ボール会社の社長の世話だ。

おれの足のさきをはさんでいたモコの足がすりあがってきた。膝のあいだをとおり、股のなかにはいる。コラ、とおれはモコの腿をたたいた。

モコは足をぬき、ななめにあわさったペットの頭を両手で抱きよせた。耳に口をつけ、なにか言っている。

モコもペットも、ママの店のホステスだ。モコは桃子の略らしい。

モッコのような発音をすることもある。

ペットは、アメリカのポピュラー・ソング「ティーチャーズ・ペット」(先生のお気に入り)のペットだ。いつも、モコにくっついていて、モコの御指導をうけているので、こんなニクネームができた。

つまり、モコが先生だ。しかし、モコがかなり歳がおおいとか、バーでもうんと先輩とかいうわけではない。

だいいち、二人とも十九歳で、からだはペットのほうがおおきい。

モコはペットの耳から口をはなし、ペットは、「ア、ハ、ハハ……」と天井にむかってわらい、おれの鼻のさきで足をばたつかせた。

ああむけに寝ころがっているためか、ペットのストッキングの膝の下のところにとるきができていて、そのあたりの皮膚が、へんにピンクに見えた。いわゆる肉色ってやつだ。ストッキングが

白なので、よけいそんなふうに目にうつったのかもしれない。

膝から上の、太腿の奥にいくにつれてのふくらみを、足のさきのほうから寝て見ると、むっちりとした肉をストッキングのなかに詰めこんだという感じがする。

ずっと前、駐留軍の料理場にアルバイトにいったとき、白いガーゼ地のような布につつまれた羊肉^{マトン}をかついだことがあったが……。

膜のなかの女の肉……ストッキングのたるみの線をリアルでなく、しかも、生っぽくだせないものだろうか。

ペットは、また足をばたつかせてわらい、膜のなかの肉のふるえが、スカートのずっと奥まで波になってつたわっていき、草いきれのようなにおいがしたみたいにおもったが、これは、視覚的なにおいかもしれない。

「ねえ、ママ……」

ペットはからだをおこし、ふくらんだ餅が、ぶすっと空気がぬけたみたいに、ストッキングの膝の下の方ふくらみがひらべったくなった。

「先生を解剖していい？」

「え？ カイボウ？」

部屋の隅の机の前に腰をおろしていたママは、ふりむかないまま、ききかえした。

ママが腰かけた椅子に、白い大きなカバーがしてあるのが、古めかしく、重役室の椅子みたいで、おかしい。

ママは、専務がつけた帳簿を見ているのだろう。この店には専務がいる。ママは社長だ。

専務は三十五、六で、いつも、ダーク・スーツを、きりっと着ていて、指に、青い大きな石の指輪をはめている。

ママと専務とが、どういう関係かは知らない。

いや、そう言えば、おれとママとは、どんな関係なんだろう。

奥沢の家に、もう明け方ちかくなつてかえつてきたママが、ベッドのなかにはいり、からだをからませるので、おれも抱きかえすと、「ちょっと、待って……」とシャワーを浴びたことがあった。

それから、ときどき、そんなことがあり、あるとき、ふっと、だれかと寝てきたんだな、という気がした。この推理は、たぶん間違つてはいまい。

そのだれかが、きまつた男、たとえばパトロンのような男なのかどうか――。

「ママも金ができたからね。今は、パトロンのような男なのかどうか」と言った者もある。すると、おれが、その若い恋人、なんだろうか。

月並で、クラシックで、ふきだしとなるような、よくあるはなしじゃないか。

事実、そんなかげ口めいた言葉が耳にはいったとき、おれは、ひとりで、ヘッ、ヘッとわらった。

「なんでもやんなさいよ」

ママは帳簿をめくりながらこたえ、「ワアー」と手をたたいて、モコモおきあがった。

先生のモコが、おれの解剖をおもいつき、生徒のペットに言わせたのだ。

モコはペットと抱きあつて、絨毯に頬杖をついたおれを見おろした。

二人が、おたがいのからだに腕をまわしたあたりが、やわらかく、なんだか毛ばだつた感じに見える。

この二人は、じつは、ニンゲンの女のコの縫ぐるみをかぶった猫の仔かもしれない。

その猫の仔が、ジュラルミン色の爪をおれの下腹につきたてて、解剖し、内臓をひきずりだすのか。

どこで見たのか忘れたが、おれは、子供のころ見た小屋掛の人形芝居をおもいだした。

それに、なんの芝居なのか切腹の場面があつて、人形のサムライが、短刀をつき刺すと、腹がやぶれ、トマト・ソースをかけたスパゲティみたいな腸臓はらわたがでてきて、おれはこわかった。

たぶん、そんな色の毛糸かなんかだったんだろう。

モコとペットの猫の爪にひつばられ、はてもなく、おれの内臓の毛糸はたぐりだされ、からだのなかに、ぼっかり穴があいて、そのむこうに、西洋のお城に湖みたいな風景が見える。

やーれやれ、こいつも、お古いシュールレアリズムだ。

「シラケるなあ」

おれは、頰杖をついていた手を、頭のうしろにまわし、あおむけになった。

「解剖される人がシラケるなんてきいたことがないわ」

モコが言い、ペットが、先生の言葉をリフレインした。

「そうよ、そうよ。解剖されて、ウハウハ泣いて、死んじまうだけでいいのよ」

「しかし、きみも、さっき、シラケるわあ、つてため息をついてたじゃないか」

「だって、せっかく、二階のママの部屋にきたのに、先生は寝ころがったきり、だまつてるんだもの」

猫の仔がシラケることがあるだろうか？ もっとも、このコたちがシラケるなんて言うときは、もとのニホン語の意味なんかカンケイない。

モコやペットが、おれのことを先生というのもこまる。

おれは、ほとんど、この新宿の店で飲んだりすることはないが、さっきも言ったように、ママが今夜はこちらに泊ろうということなので、奥沢の家にはかえらず、店に顔をだした。

すると、新聞や雑誌の写真だけでしっている油絵の大家だいの中村陽が女たちにかこまれて飲んでおり、モコやペットもいて、かなり派手なストライプのシャツのカラーからでた、古い椎の木の肌みたいな皺がよった中村陽の首すじにぶらさがっていたが、モコやペットが、陽ちゃん、陽ちゃん、とよんでるのが、中村大先生なのにおどろいた。

しかし、ま、バーっていうのは、そんなところだろうとおもい、隅のボックスに腰をおろすと、「わあ、先生」とモコとペットがこちらにはしってきて、おれは背中が寒くなった。

気のせいかな、中村陽がいたボックスは声がひくくなり、「先生って、あの若い男は、なんの先生なんだい?」「エカキよ」「ふうん、そんな名前はしらないな」「去年か一昨年あたり、芸大を出たらしいわ。ママの恋人なのよ」というひそひそばなしがきこえるようで、だいいち、そんな俗っぽい、つまらない想像をしたのが、なさけなかった。

いや、それよりも、店のホステスたちが、おれを先生とよぶのは、ママがそう言わせているからで、そのことが恥ずかしい。

ママは、おれみたいな若僧を先生とよばせることの残酷さに気がついていないのだろうか。

おれは、自分が「先生」という名の飼犬のような気がした。

事実、ママから寝るところとエサとアトリエをあてがってもらっている。

モコとペットがすりよってきた。モコがおれの口からタバコをとり、一服すって、灰皿につっ

こんだ。

「カイボウ、はじめ！」

モコが号令をかけて、ペットがおれのシャツのボタンに手をかけた。

「あら、先生は胸毛があるわ」

ペットは報告し、モコは、ひとつはずしたボタンのあいだから、指をつっこんだ。

「こんなちよろちよろした毛、胸毛のうちにはいらなわ」

「痛い。よせ」おれはさげんだ。

「あばれると、解剖ができないじゃない。ペット、先生の上にのりなさい。ちがうったら……そう、お尻をむこうにむけて……」

ペットは、おれの胸をまたいで、腰かけた。お尻の左右のまるみが、鎖骨にぶつかる。鼻の骨が、ペットのお尻のわれ目の上のはうにはいりこんだ。

つめたい指と、あったかい湿りのある指が、シャツのボタンをはずし、おれの腹をひらいていく。あったかい指のほうが、ペットだろう。

わあ！ まあ！ シャツのすそをズボンからひっぱりだし、モコとペットは大きな声をあげた。

「芽キャベツみたい」

「ハマグリのお煮にも似てるわ」

つめたい指と、あったかい指が、かわるがわる、へソの方にはいつてくる。

「あら、先生のおへソのゴマ、白ゴマだわ」

「ちがうわよ、ペット。ほら、黒ゴマよ」

つめたい指の爪が、おれのへソのなかをひっかいた。

「だって、これ、白ゴマでしょう」

「ほんと……先生のおへソ、白ゴマと黒ゴマがあるわ。幕内弁当ね」

ペットは自分で言って、からだをうしろにそらし、ふきだした。

お尻の左右のまるみがかさなる谷間が、おれの鼻の骨をはさみこんで、こすりあげ、こすりさげる。

そんなカッコではなく、そういう触覚を絵にできないものだろうか。

あったかい指よりも、もっとあったかく、ぬらぬらしたもの、へソにはいつてきた。意外にかたいそのさきっちょで、おれのへソの底をつついている。

「わあ、しょっぱい」

モコがさげんだ。舌で、おれのへソをなめたらしい。

べつの、ぬらぬら、なまあったかいやつがはいってくる。生徒のペットがモコ先生の真似をし